

最古の壺棺再葬墓

——根古屋遺跡の再検討——

設 樂 博 己

-
- | | |
|-------------|---------|
| 1 はじめに | 4 抜歯の分析 |
| 2 根古屋遺跡の概要 | 5 おわりに |
| 3 土器棺の時期と系譜 | |
-

論文要旨

東日本の初期弥生文化を特徴づける墓制は、再葬墓である。再葬は、いったん遺体を土中に埋めたりして骨になるのを待ち、再びそれを埋葬する葬法をさす。この時期、とくに壺棺が蔵骨器として多用されるために、そうした再葬を壺棺再葬の名で呼んでいる。

壺棺再葬墓の葬法や葬墓制に関しては、解決しなくてはならない問題が山積しているが、なかでもその起源を明らかにすることは、もっとも重要な研究課題のひとつである。本稿は、壺棺再葬墓の起源をさぐる基礎作業として、最古の壺棺再葬墓遺跡のひとつと目される福島県根古屋遺跡の土器と抜歯について、その時期と系統を分析した。

その結果、根古屋の土器棺はおおむね大洞A'式と氷I式に並行する時期であることを確認した。そして、体部文様のモチーフの変遷と系統、文様表出手法や器形、地文などの分析から、根古屋の土器は在来の系統の土器に、中部東北地方などの強い影響が加わって成立したものであり、会津地方などの浮線文土器も流入しているが、その系統的な区分は比較的明確になされており、晩期の土器のありかたを踏襲していることを明らかにした。しかし、会津地方の技法と、中東北地方以北に顕著な技法がひとつの土器のなかに融合していることや、大洞A、A'式に系譜が求められる大形壺、甕から変化した大形壺の出現など、大形壺をめぐる新たな動きを重視した。

抜歯のありかたも、土器と類似した特徴を示すことを確かめた。すなわち、関東、南東北地方の縄文晩期の抜歯様式を受け継ぎながらも、東海地方の影響で、抜歯過程が変容していることを指摘した。この時期の中部地方は稻作をおこなっていた可能性が議論されており、壺棺再葬墓の成立、西日本系抜歯による在来の抜歯の変容といった大きな文化変容の背景として、生産様式の異なる外来文化の影響を考える必要があること、そしてそれはすでに根古屋遺跡のなかに認められることを、土器と抜歯を通じて予察した。